

南朝における集団文学の形成 —蕭子良の西邸を起点として

李墨宇

はじめに

永明文学を論じる上で、蕭子良の文学集団は注目すべき存在である。当時の最も優れた詩人たちが蕭子良の西邸に集って文学活動を行い¹、詩文を詠っており、蕭の主催した行事は後世に至るまで語りぐさとなった。このことは彼の集団の特質と関連していると考えられる。

中国の歴史においては、文学と関わりをもつ集団が数多く存在してきたが、そのほとんどは、子弟の教育を目的として氏族のつながりによって成立した集団、あるいは政治的なつながりによって成立した集団のいずれかに属するものである。このうち政治的な集団の結成は先秦時代まで遡ることができ、その結成の目的は、招致する側について「招致賓客，以相傾奪，輔國持權」（『史記』「春申君列傳」）と記されたように²、権力の争奪であった。招致される側は政治上の出世を目的として、権力者のもとに集まったのである。時代が下って漢魏晋には、諸侯王である梁孝王や淮南王、権臣である竇憲・董卓・曹操・賈誼らのもとでも集団が結成された。こうした集団においては、主催者の好みや提唱を受けて、政治的集団による文学活動が行われたものの、文学はあくまでも出世の手段であり、政治活動に従属するものであった。そのメンバーたちは本質的には、文学的才能をもった官僚であり、彼らと集団の主催者との間には政治的な従属関係が存在していたのである。晋代以降、藩王が文学の士を招致することが恒例となった。唐の陸龜蒙は「説鳳尾諾」で「晋より梁陳に訖りて以來、藩邸の書は、凡そ子弟を封じて王と為せば、則ち府を開きて僚属を辟し、當時の士の学行才藻有する者を取りて是の選に中つ。」³と述べ、藩王が士を集めたのは属官に任命するためであったと指摘している。南朝における藩王を中心とした集団の結成は、おおかたこのような経緯によるものであった。

ところが蕭子良が西邸に招いた人々は、蕭子良に仕える僚属によって構

成された文学集団というわけではなかった。彼は自身の属官に限らず、広く士を招致したのであり、これは彼の集団の非政治性を示す証左の一つだと思われる。勿論、たとえ府主の側に政治のために士を招致しようとの意図がなかったとしても、士人たちはやはり政治上の出世を求めて集まってきたことだろう。いかに府主が政治的な舞台から遠ざかっているとしても、諸王としての身分を有している以上は、結果的に、出世を求める士人たちにある種の機会を提供することになっていたのである。そして、これこそが藩王の主催する文学集団の求心力となっていた。

藩王の影響力と集団の非政治性、この二つの特徴を兼ね備えていたがゆえに、蕭子良は文学の士を広く招致することに成功し、西邸は当時の文人たちにとって、互いに交際し学び合うための場となった。本稿は西邸を中心に据え、蕭子良の文学集団において行われた行事と集団メンバーの創作した詩文を主な題材として、集団文学の成立について研究する。

一、蕭子良文学集団の性格

西邸で行われた行事や詩文の唱和について論じるためには、まず蕭子良文学集団の性質を明らかにする必要がある。

(一) 政治的影響の希薄さ

上に述べたように、蕭子良文学集団を特徴づけ、ほかの集団と区別する性質は、その非政治性であった。この非政治性は、(1) 集団メンバーの身分(どの政治集団に属するか)、(2) 属性(集まった士人たちの経国への適性のなさ、また西邸通いにおける自由度の高さ)、(3) 府主である蕭子良の性格という三つの方面に表れている。

蕭子良文学集団において最も有名なのは竟陵八友である。「竟陵八友」が実在したかどうかについては論争があるが、彼らが蕭子良の文学集団に参加していたことは確かである。「竟陵八友」に初めて言及したのは『梁書』『武帝本紀』であり、そこには「竟陵八友」として八名が挙げられている。それより以前に、蕭繹は『金樓子』『説蕃』において、蕭子良の西邸へ通っていた蕭衍をはじめとする文士十一人を挙げている。また『資治通鑑』は『梁

書』「武帝本紀」の記載に従い、「永明二年」項に「竟陵八友」をはじめとする蕭子良集団のメンバー十三人を記している。

詳しい記載は以下の通りである。

『金樓子』：蕭衍、王融、謝朓、張思光、何憲、任昉、孔廣、江淹、虞炎、何遜、周顒。（「説蕃」）

『梁書』：蕭衍、沈約、謝朓、王融、蕭琛、范雲、任昉、陸倕（「武帝本紀上」）

『梁書』：沈約、蕭琛、王融、謝朓、范雲、任昉（「沈約伝」）

『資治通鑑』：記室參軍范雲、蕭琛、樂安任昉、法曹參軍王融、衛軍東閣祭酒蕭衍、鎮西功曹謝朓、歩兵校尉沈約、揚州秀才吳郡陸倕、法曹參軍柳惲、太學博士王僧孺、南徐州秀才濟陽江革、尚書殿中郎范縝、會稽孔休源（「卷第一百三十六」）

上の書物に記載されたメンバーは必ずしも一致していない。全ての書物において言及されているのは蕭衍、王融、謝朓、任昉の四人であり、そうでない人物としては沈約、范雲、蕭琛、陸倕、張思光、何憲、孔廣、江淹、虞炎、何遜、周顒、柳惲、王僧孺、江革、范縝、孔休源の十六人がいる。このほか『南史』「王僧孺伝」には虞羲、丘國賓、蕭文琰、丘令楷、江洪、劉孝孫、徐夤の七人が記されている。なお王亮・宗夬・謝璟・陸慧暉の伝記からも、彼らが西邸の文学活動に参加したことが知れる。本稿では以上の三十一人を中心として考察する。上記の書物中の記載を見ると、参加メンバーの官職について言及しているのは『資治通鑑』のみであるが、そこに記載された官職は、彼らが西邸に通い始めた時点での官職ではないかと疑われる。沈約が歩兵校尉に任官されたのは建元四年、王儉が衛軍將軍に任官されたのは永明元年であることから、蕭衍が衛軍東閣祭酒に任官されたのもこの頃ではないかと思われる。また范雲が記室參軍となったのは蕭子良が司徒に任官されたのと同年、すなわち永明二年のことははずである。つまり、西邸に通い始めた時点では、沈約と蕭衍のいずれも、蕭子良の幕僚ではなかった。『資治通鑑』の記載を信用するなら、蕭子良の招士は西

邸を開くより以前の南斉初年まで遡り得る。

メンバーによる連句詩「陽雪連句遙贈和」を収録する『古詩紀』・『謝宣城詩集』は、作者一人一人の身分について、謝朓、江秀才革、王丞融、王蘭陵僧孺、謝洗馬昊、劉中書繪、沈右率約と記しており、これらは彼らが蕭子良集団に加入した後の官職だと考えられる。謝朓・范雲・劉繪・蕭衍・虞羲など西邸の文学活動に参加していた文人はしばしば同題詩や唱和詩を詠んでいるが、これらの詩は竟陵王の西邸において作られたと思われる。当時作られた詩のうち、詩題に官職が見られるものは以下の通りである。

王融「蕭諮議西上夜集詩」、宗夬「別蕭諮議」、任昉「別蕭諮議」、王延「別蕭諮議詩」、蕭琛「別蕭諮議前夜以醉乖例今晝由醒敬應教詩」

蕭衍「答任殿中宗記室王中書別詩」

王融「餞謝文學離夜詩」、范雲「餞謝文學離夜詩」、沈約「餞謝文學離夜詩」、劉繪「餞謝文學離夜詩」、虞炎「餞謝文學離夜詩」、蕭琛「餞謝文學詩」

謝朓「和別沈右率諸君詩」

以上の詩は蕭衍・謝朓が荊州へ赴任する際、蕭子良文学集団のメンバーと交わした別詩である。永明八年に随王蕭子隆は鎮西將軍、荊州刺史に任官され、九年には「親府州事」となった。その後蕭衍は鎮西諮議參軍、謝朓は随王文学に任官された。詩題に出る「沈右率」、「任殿中」、「宗記室」、「王中書」とは当時の沈約、任昉、宗夬、王融それぞれの官職である。

特に注目したいのは、沈約と謝朓である。史書には謝朓が蕭子良の属官に任じられたという記載は見えない。彼は蕭子隆の随王文学に任官される前には、王儉衛軍東閣祭酒・太子舍人・随王鎮西功曹に任じられていたのであり、他の政治集団のメンバーでありながら西邸の活動に参加していたと推測できる。沈約が蕭子良の司徒右長史に任官されたのは永明中のことであり、彼の「為文惠太子解講疏」に「皇太子以建元四年四月十五日，集大乘望僧於玄圃園安居」とあることから建元四年の撰であることが分かる。『梁書』には沈約について「齊初為徵虜記室，帶襄陽令，所奉之王，齊文

惠太子也。」⁴と書かれており、彼が文惠太子に仕えた時期はこの時点まで遡れるのではないかと思われる。鈴木虎雄(一九二八)の沈約年譜によれば、建元四年から彼は文惠太子の太子家令に任じられていた⁵。翌年、彼は「為齊竟陵王發講疏」を撰すが、その文中には「永明元年二月八日」と明記してあるため、この書物は永明元年の撰であると考えられる。樂藹の撰した「與右率沈約書請撰豫章文獻王碑文」の題目を見るに、豫章王蕭嶷の没年は永明十年であるから、沈約は少なくともその時点までは太子右衛率に任官されていたと推測できる。なお、謝朓が荊州へ赴任する時作った「和別沈右率諸君詩」でも沈約は「右率」と称されている。鈴木氏が沈約の年譜において指摘しているように、沈約が永明四年から蕭子良の司徒右長史に任官されていたのだとしても⁶、永明初期や永明後期には文惠太子に仕えると同時に竟陵王子良主催の文学活動にも参加していたということは疑いない。

蕭子良の幕僚が全て西邸に参加したわけではなく⁷、西邸に参加したのが全て蕭子良の幕僚だったわけでもなかった。劉繪は豫章王の主簿に任官された経験をもち、『南齊書』は蕭嶷の彼に対する態度を「僚史之中、見遇莫及」(『南齊書』卷四十八)と評価している。この「主簿」という官職について、嚴耕望(一九六三)は「主簿地位雖低…(中略)…朝廷對此職殊為重視，不輕除授；而府主必欲用其親信；其職之親要從可推知」と指摘しており⁸、腹心しか任じられなかったことが分かる。劉繪は豫章王と文惠太子との不仲を苦にして地方へ転任し、永明末年に蕭子良文学集団に参加した⁹。沈約のほか、文惠太子集団に属する虞炎と周顒も西邸の活動に参加している。当時、王儉を中心とする集団も存在し、汪春泓(二〇〇六)は政治上の権力をめぐって文惠太子は王儉と不仲だったと指摘している¹⁰。にもかかわらず、王儉は蕭子良の西邸の活動に参加しているのである。たとえば王儉の作品の中に「竟陵王山居贊」という文がある。さらに同じく王儉作の「和竟陵王子良高松賦」も蕭子良に唱和して作った賦であり、沈約・謝朓にも同題賦が見えることから、西邸で作られたものと思われる。

以上の分析に基づいて考えれば、沈約・謝朓をはじめとする西邸文士と竟陵王との交際は政治的なものではないと思われる。齊梁時代以降、文人

が各集団の間で流動的に動くことが頻繁に見られるようになったとはいえ、もしも西邸が他の団体と同じく政治的な性質を有していたとすれば、ほかの政治団体のメンバーとしての身分を持つ人物が、自由に西邸での活動に参加することが許されたということは考えにくい。可能な解釈としては、蕭子良の集団にはそもそも政治的色彩が薄かった、ということだろう。これは西邸の文学活動に参加した文人が数多くいながら、政治上蕭子良を支持していた人はそれほど多くなかったことの理由の一つではないかと思われる。『南史』「梁本紀」に「及齊武帝不豫，竟陵王子良以帝及兄懿、王融、劉繪、王思遠、顧暉之、范雲等為帳内軍主。」と書かれているが、多くの勢力が競り合う局面で、彼が頼ることのできる臣下はこの七人しかいなかったのであろう¹¹。

王淑嫻（二〇〇四）は西邸文人が政治上蕭子良を支持しなかった理由を分析して、彼らはそもそも文惠太子の属官であり、太孫である蕭昭業が皇位を継げば、自然に新しい政府の要職に任官されたので、ことさらに蕭子良を支持する必要はなかったのだと述べている¹²。では、なぜ蕭子良は文惠太子を支持するメンバーを自分の集団に迎え入れたのだろうか。それは彼がもともと、政治上の幕僚を招致しようとしたわけではなかったからであろう。文惠太子の幕僚でありながら蕭子良文学集団に参加するメンバーが複数おり、しかも彼らは政治的な面では蕭子良を支持する気がなかったということこそ、蕭子良集団の性質を示しており、側面から蕭子良集団の非政治性を説明している。

蕭子良が招致した士と文惠太子が招致した士とでは、その属性が異なっていた。『南史』卷四十四には文惠太子の招士について「文武士多所招集」と記載されている。蕭長懋が武人を招致したのに対して、蕭子良の西邸に招かれた士は、そのほとんどが文学の士である。それは果たして個人的な好みであったのか、あるいは武人を招致することができなかったのか。筆者は後者ではないかと考える。『宋書』顔竣伝には「元嘉中，上不欲諸王各立朋黨」とあるが、齊武帝の場合も同じだったのであろうか。

では、蕭子良の文学集団はなぜ許容されたのか。それはやはり西邸学士の属性と関係していたと考えられる。齊武帝は西邸学士を軽蔑する態度を

露わにしており、『南史』卷七十七には彼が「學士輩不堪經國，唯大讀書耳。經國一劉系宗足矣。沈約王融數百人，於事何用。（學士の輩は經國に堪えず、唯だ大いに讀書するのみ。經國は一劉系宗にて足れり。沈約・王融數百人、事に於いて何の用ならん。）」、すなわち沈約・王融のような文士が數百人いようと、政治上には何の影響ももたらさないと書いたと書かれている。従って、現在度々論じられるように、蕭子良が齊武帝の命令を受け、文惠太子を補佐するために西邸を開いたとは想像しにくいのである¹³。

再び蕭子良の招士に関する議論に戻りたい。史書には、彼の招致した文士が西邸でほかの府主に招かれたという記載が見られる。

たとえば『南史』には、宗夬が南郡王に招かれたことが記載されている。

時竟陵王子良集學士於西邸，並見圖畫，夬亦預焉。齊鬱林之為南郡王，居西州，使夬管書記，以筆札貞正見許，故任焉。…（中略）…及文惠太子薨，王為皇太孫，夬仍管書記¹⁴。

時に竟陵王子良は西邸に學士を集め、並びて圖畫を見、夬も亦たここに預かれり。齊の鬱林南郡王と為り、西州に居り、夬をして書記を管らしめ、筆札の貞正を以て許さる、故に焉に任ず。…（中略）…文惠太子薨ずるに及びて、王は皇太孫と為り、夬仍ほ書記を管る。

蕭昭業は幼い頃から蕭子良のもとで育てられた。永明二年に蕭子良が西州の鎮に任じられ、昭業も共に西州へ移住した。永明五年、蕭子良が西邸を開くと、蕭昭業は独りで西州に暮らすようになった（『南史』卷五）。彼と宗夬との出会いは竟陵王の府においてではなかったかと推測できる。

宗夬のほか、王僧孺が文惠太子に招致されたという記載もある。

司徒竟陵王子良開西邸招文學，僧孺亦遊焉。文惠太子聞其名，召入東宮，直崇明殿。欲擬為宮僚，文惠薨，不果¹⁵。

司徒竟陵王子良西邸を開きて文學を招き、僧孺亦た焉に遊ぶ。文惠太子其の名を聞き、東宮に召き入れ、崇明殿に直（あ）つ。擬して宮僚と為さんと欲するに、文惠薨じて、果たせず。

これによれば、文惠太子は西邸に招かれた王僧孺の令名を聞いて、彼を自分の宮僚にしようとしている。

仮に蕭子良の集団が政治的な集団であったとすれば、文惠太子も南郡王も安易に彼の幕僚を招致することはできなかつただろう。南朝の府主と属官の関係について、石井（一九八五）は南朝の随府府佐を論じた際、「属官が随府を繰り返すとき、府主との私的情誼関係もこれに比例して強まり、名実ともにほとんど固有の家臣と呼べるような様相をも呈するに至っている。」と指摘した¹⁶。また川勝（一九八二）は六朝時代における官長と属吏との関係は私的な主従関係であったと主張する¹⁷。こうした事柄を鑑みて、蕭子良集団の結成の目的が文惠太子の勢力構築にあったとすれば、たとえば文惠太子と不仲な豫章王や王儉の幕下にいた劉繪・蕭衍のような文士は、到底そこには参加できなかっただろう。当時の実状を鑑みて下しうる唯一の解釈は、蕭子良の西邸集団は政治的な集団ではなかったということなのである。

蕭子良は政治に対して興味が薄く、また能力にも乏しかった。皇位継承の紛争に際して、蕭子良は賑内軍主を任命し、王融に擁立されたが、武帝がなくなった時、彼は動揺した態度を見せた。ゆえに、王融は「公誤我」と嘆いた（『南齊書』卷四十七）文惠太子が薨じた後、彼に皇位を継承する意思が全くなかったとは言えないが、最初から皇位継承に意欲を示していたとも言い難い。王融が蕭子良を擁立したことに対して、蕭衍は「夫立非常之事，必待非常之人，融才非負圖，視其敗也。」と述べ¹⁸、范雲は「憂國家者，惟有王中書。」と返したものの、蕭衍の意見を否定せず、また蕭子良の賑内軍主として特に対応措置を取ることもしなかつた（『南史』卷六）。蕭衍は自分の利益から蕭子良を支持しなかつたようであるが、太学生の虞羲と丘國賓はただ蕭子良と王融の才能から、「竟陵才弱，王中書無斷，敗在眼中矣。」（『南史』卷二十一）と判断した¹⁹。蕭子良に政治才能が欠けていたことは、蕭衍が蕭子良に代わって蕭鸞の陣営に入った原因の一つではないかと疑われる。

ほかにも蕭子良の政治才能の乏しさを示す記載が見られる。『南史』の

記載によれば、蕭子良が司徒に任官されていた時期に、巴東王子響が荊州で上佐を殺害し、民心を動揺させた。ところが蕭子良はこのような状況を見て見ぬふりをし、西郊に邸宅を建て、遊んでばかりいた。そこで南郡王の文学であった蕭衍は、石頭城に戻るよう子良に意見した。しかし、蕭子良はその建言を全く聞かなかったため、蕭衍は仕方なく范雲にこのことを伝え、范雲が王植を通じて武帝に上書したことで、蕭子良は石頭城を鎮するようになったという（『南史』卷五十七）。この記載からも、蕭子良には政治の才能がなく、文士たちに諫められても政治に真剣に取り組もうという意識は生まれなかったことが分かる。能力という以前に、そもそも意欲がなかったのである。

蕭鸞に対する態度からも、蕭子良の政治的能力の乏しさは窺える。文惠太子は蕭鸞について、かつて蕭子良に「我意色中殊不悅此人」と語ったが、蕭子良はそれに対して何も感じず、逆に蕭鸞のために弁解した（『南齊書』卷二十一）。後に武帝が亡くなった時、「遺詔使子良輔政，高宗知尚書事」と命じられたにもかかわらず、蕭子良は世務を煩わしがって全ての事務を蕭鸞に任せた（『南齊書』卷四十）。既に文惠太子から警告を受けていたのに、まるで蕭鸞を警戒しようとせず、ついには南齊王族を覆没へと導いたのである。このことから見ても、決して政治才能があったとは言えないであろう。

さて、蕭子良はこれほどまでに政治上の野心がなかったにもかかわらず、なぜ西邸を開いたのか。次節ではその問題について分析したい。

（二）出身を問わない招致

以上では蕭子良集団の非政治性について論じたが、これと反対の意見も見られる。たとえば汪春泓（二〇〇六）は「論王儉與蕭子良集團的對峙對齊梁文學發展之影響」において、蕭子良は当時世家門閥出身の文士を招致していた王儉の政治勢力と対抗するため、もっぱら寒門出身の士人を招致したのであり、彼の動機は政治的なものであったと論じている²⁰。しかし王淑嫻（二〇〇四）の「蕭子良文人集團之組成及其政治意義試探」に出る表によれば、蕭子良が招致した士のうち、寒門出身者や低層士族の出身者

の占める割合は全体の五分の二にとどまっている²¹。蕭子良の招士について、『南齊書』には「天下才學皆遊集焉」と記載されており、彼が招致したのは「天下才學」であって寒門に限られてはいないということが分かる。西邸の文学サロンに参加した者の中には范雲・任昉のような寒士がいたが、同時に王融・王亮・謝朓・謝璟のような一流門閥の出身者もいた。以上のことからみて、確かに王儉の集団と比べれば、蕭子良の文学サロンに参加した寒士は多かったが、それは彼らが王儉の集団に拒否されたため、蕭子良の文学集団に参加するほかなかったからだったのではないか。蕭子良自身に寒士を招致する意図があったとは認められず、またそれが政治的策略から出たものであったということも考えられない。ただ、蕭子良の招致が出身を問わないものであったために、結果として寒士が多く集まり、西邸で活躍するという状況が出来したのである。

(三) 西邸の性質

これまで論じたように、竟陵王文学集団が結成されるにあたっての原動力が政治ではなかったとすれば、いったいどのように形成されたのだろうか。それは類書の編纂と関連があると言われているが、蕭子良の招士活動はそれ以前からすでに始まっていた。『南齊書』蕭子良伝には「五年、…(中略)…移居雞籠山邸，集學士抄五經、百家，依皇覽例為四部要略千卷。」²²とあり、蕭子良が西邸を開いたのは永明五年のことであるが、『南齊書』「永明四年」項には「子良少有清尚，禮才好士，居不疑之地，傾意賓客，天下才學皆遊集焉。」とあり²³、これは永明五年に西邸を開くより以前のことと判断できよう。また、上に論じたように、沈約・范雲などの蕭子良との交際は南齊初年から始まっており、蕭子良集団の活動もその時から始まったのではないかと思われる。さらに、なぜ蕭子良は西州を離れ、わざわざ雞籠山に西邸を開いたかといえ、おそらく当時彼のもとに集まってきた文士が多くいたため、新たにより広い場所へ移り、自分の集団を改めて準備しようとの意図があったのではないか。賓客の招致は一朝一夕にできることではなく、やはり西邸を開く前から招致を開始し、西邸に移住した頃には蕭子良集団の最初期の形態は既に出来上がっていたのではないかと疑わ

れる。

蕭子良がなぜ士を招致したのかについて、蕭繹は「好文学」（『金樓子』説蕃）と述べる。当時で言う「文学」とは、近世以降に言う「文学」とは異なり、学問・学術の意味も含まれており、ここでいう「好文学」と淮南王などの「為畔逆事」とはまったく異なるものである。蕭子良の文学への好みは西邸集団の非政治性の原因の一つであった。さらに、先に齊武帝が諸王の政治勢力に対して警戒心をもっていたことについて言及したが、権力への野心に対する疑いを避けようとすることも、文学・学術的なサロンを主催する原因の一つではないかと考えられる。政治上の目標を到底実現できないと諦めたなら、曹丕が言った「立德揚名」も一種の生き方だったのだろう。

では、なぜ彼は雞籠山を選んで西邸を開いたのか。それは雞籠山の風景や歴史と関係していると思われる。雞籠山に邸宅を建てることは劉宋時代の劉宏にまで遡れる。『南史』卷十四には「宏少而閑素，篤好文籍，文帝寵愛殊常，為立第於雞籠山，盡山水之美。（宏少くして閑素たり、篤く文籍を好む。文帝の寵愛は常と殊なり、（宏の）為に雞籠山に第を立て、山水の美を盡くす。）」とあり²⁴、この記載から、雞籠山は風光明媚な場所であったと分かる。この記述にはまた、劉休度が文籍を愛好したことが示されており、これは蕭子良と同じである。文籍を愛好することと雞籠山に邸宅を開くこととの間には関連性があるのだろうか。雞籠山について、元の張鉉は『至正金陵新志』「儒林」において「宋元嘉十五年，（雷次宗）徵至都，開館於雞籠山，聚徒教授，置生百餘人。」と記す²⁵。劉休度は元嘉二十一年に建平王に封じられたが、その時雷次宗は既に雞籠山に学館を開いたのである。蕭子良が劉休度と同じく雞籠山を選択したのも、ここに原因があるのではないか。丁國祥（二〇〇八）は蕭子良が雷次宗の学館の跡地を利用して西邸を建てたと述べるが²⁶、南唐の徐鉉は「龍山泉銘」で「建康城北有雞籠山焉。…（中略）…雷次宗之儒學，蕭子良之西邸，遺蹤可識，爽氣長留。」と書いており²⁷、このことから雷次宗の儒学館と蕭子良の西邸とは別の建物であったと推察される。そうだとすると、蕭子良の西邸はやはり学館と密接に関連していたと思われる。『南史』卷二十三の「齊竟

陵王子良開西邸，延才俊，以為士林館」という記載によれば、蕭子良は西邸を「士林館」と呼んでいたのである。南齊以後、梁陳はともに官学を設置し、士林館と名付けた。これ以前の官学は東觀、崇文館、總明館などと名づけられていたが、「士林館」という名前の使用は蕭子良の西邸が初めてのことである。蕭衍と蕭子良の交際を考えれば、名前の一致は偶然ではなく、梁の「士林館」は蕭子良の影響を受けたのではないかと推測できる。清の顧祖禹は梁の士林館について「大同七年，又立士林館於宮城西，皆會集諸儒講學談禮之所。」と記載している²⁸。この記載から見れば、梁の士林館は学士が講学を行ったり、礼について議論し合う場所であった。推測するに、同名の西邸の士林館もまた、これと同様に学館的性質をもっていたのであろう。

『梁書』には蕭子良が西邸を開き、士林館の学士の肖像を描いたとの記載が見える²⁹。最初のうちは聖賢の像が描かれたが、漢代以降は聖賢のほか、功臣の像も描かれるようになった。たとえば漢宣帝は功臣二十四人を麒麟閣に描き³⁰、漢明帝は南宮雲臺に二十八將を描いたとの記載がある³¹。『三國志』譙周伝において、裴松之は『益部耆舊伝』の「益州刺史董榮圖畫周像於州學」を注に引いているが、これは儒者の肖像を州学に描いた最初の記録である。蕭子良が士林館の学士の肖像を描いたのも、これと同様の事跡だったのであろう。

個人で学館を開くことについて、南齊にその先例が見える。『南齊書』王儉伝には、「於儉宅開學士館，悉以四部書充儉家，又詔儉以家為府。」と記載される³²。すなわち王儉の邸宅には四部書が置かれ、学士館として開かれるようになった。その後、王儉も賓客を招致して、「令史諮事，賓客滿席，儉應接銓序，傍無留滯。」と盛況を呈するようになった³³。講学や談義などの活動を全て王儉の邸宅にて行い、彼の邸宅はまるで学館のようであったというが、蕭子良の西邸もこれと同じような場所だったと判断してよいのではないだろうか。

二、蕭子良文学集団における行事と詩文創作

(一) 西邸の行事

1、名儒・名僧の招致

西邸集団は学館的な性質をもつグループであり³⁴、そこでは学館で行われるようないくつかの特別な行事が行われた。その一つは、名僧を招致し、講席を開くことであった。蕭子良は仏教徒として有名であり、西邸でも仏教的な活動を行っていた。『南齊書』には「招致名僧、講語佛法、造經唄新聲」と記載されており³⁵、慧皎の『高僧伝』には彼が求那跋陀羅・釋慧忍などの訳経僧や唱導僧、釋僧鍾などの義解僧十一人を招致し、師事していたことが記されている。このうち後者には「迭興講席」、「屢請講説」とあり（「卷第八・義解五」）、当時蕭子良が繰り返し僧人を招き、講席をさせていたことが分かる。この講席を傍聴したのは蕭子良だけではなく、西邸学士は皆参加していたことが推測される。蕭衍・沈約らが仏教を信仰したのは、このような行事に影響を受けてのことだったとも考えられる。

名僧のほかに、蕭子良は当時名儒も招致しようとしていた。『南齊書』によれば、永明初年に蕭子良は劉瓛を自らの征北司徒記室として招こうとした（『南齊書』卷三十九）。結局劉瓛本人には断られたものの、その学生である杜栖が豫章王の議曹從事として招かれ、後に蕭子良も彼に対して「數致禮接」という（『南齊書』卷五十五）。その後、國子祭酒の何胤が礼を修めた際、杜栖を婚冠儀を掌管する学士に任官しており、このことから杜は儒家の礼に詳しくたと推測できる。王融は蕭子良のために劉虯へ手紙を書き送り、蕭子良の意思を伝えようとした。劉虯は隱逸の士として知られるほか、「好學」とも評価されており（『南齊書』卷五十四）、これも蕭子良が彼の招致を望んだ原因の一つだったのではないかと推測される。

蕭子良が劉瓛、杜栖、劉虯を招致したことは、ほかの西邸学士の場合とはいささか異なっていたと考えられる。西邸学士のメンバーでも、たとえば范雲・沈約は諸王府に任官されている若い属官や太学生であったが、上の三人はそれとは異なり、西邸における教師のような立場だったのではないかと推測される。三人の招致は、その名望を借りて自分の名望を上げるためだけではなく、諮問の意味もあったと考えられる。蕭子良は西邸に古齋を建て、古人の器物や衣服を蒐集していた。『南齊書』卷三十九には「竟陵王子良得

古器，小口方腹而底平，可將七八升。以問澄，澄曰：『北名服匿，單于以與蘇武。』子良後詳視器底，有字髣佛可識，如澄所言。（竟陵王子良古器を得るに、小口方腹にして底は平らかなり、七八升を將るべし。以て澄に問ふ。澄曰く：『北の名は服匿、單于以て蘇武に與ふ。』子良後に詳しく器の底を視るに、字の髣佛として識るべき有り、澄の言ふ所のごとし。）」という記載がある³⁶。当時陸澄は國子祭酒に任官されており、蕭子良集團のメンバーではなかったが、蕭子良は上のように骨董について彼に質問していたのである。彼らが談話したという場所は、恐らく西邸にある古齋だったと推測できる。

儒学を習い究めるために用いられた場所は、西邸の建物だけではない。現存する蕭子良の詩の中には「登山望雷居士精舍同沈右衛過劉先生墓下作詩」という作品があり、この詩に対して、蕭子隆と沈約、謝朓、虞炎、柳惔などの西邸集團のメンバーたちは奉和詩を詠ったが、そこには彼らが蕭子良に従って山に登り、名儒である雷次宗の精舍を眺めて、劉歙の墓参りをしたことが示されている。雷次宗の精舍はちょうど西邸の所在地である雞籠山に建っており、劉歙の墓も蕭子良たちの集会の場所から遠くない。この時の山登りに参加したのは以上の六人だけではなかった可能性もあるが、残っている唱和詩はこの六人によるもののみである。西邸の建物以外の場所においても、蕭子良集團のメンバーたちはさまざまな形の文学的な行事を行い、そうした場で詩を創作していたのである。

2、類書の編纂

蕭子良は学士を集め、西邸において書物を編纂していた。これについて、『南齊書』蕭子良伝には「集學士抄五經、百家，依皇覽例為四部要略千卷」と記されている。『皇覽』は三国時代に編纂された類書であるため、四部要略も類書のような書物だったのではないかと思われる。『南史』「齊本紀上第四」には蕭道成に関して「詔東觀學士，撰史林三十篇，魏文帝皇覽流也。」と書いてあり³⁷、蕭子良より前に、蕭道成も類書を編纂していたことが分かる。なお、ここでいう東觀學士というのは官学の學士である。中国においては古くから「盛世修書」の伝統があり、大規模な書物の編纂はただ文

化のための事業というだけではなく、国家機構に関わる行為であった。蕭子良の西邸での編書活動も一文学集団の好みだけでなく、国家的な行為として一定の組織や秩序に則っていたはずであり、この意味では西邸も学館的な場所として見るができるだろう。

王融の「抄衆書応司徒教詩」には彼らの抄書活動について「巖筍發仙華，金籐開碧篆」と詠われており、沈約の「和竟陵王抄書詩」も「冠楚綴淪詩，披滕辨蠹冊」、「綠編方委閣，素簡月盈輜」というように西邸における抄書活動を詠っている。書物の閲覧・抄写を通じて西邸学士たちが典故や故事を知ったことは、彼らが詩文を創作する素材となったと考えられる。西邸において作られた「応教詩」や「奉和詩」の創作は編書の行事と関係があると、筆者は考える。すなわち、蕭子良の主催による詩の創作は、類書の副産物だったのである。その具体的な内容については第二節で論じたい。

3、「文章談義」

蕭子良の集団と、同時期に存在した文惠太子や王儉の集団との最も大きな相違は、前者の詩文への重視であると考えられよう。王儉の集団には儒学を重んじる傾向があったと思われるが、文惠太子集団の文学活動については史書に記載がなく考察することができない。しかし文惠太子が招致したのが文武の士であったことに鑑みて、やはり政治的な色彩が濃かったのではないだろうか。彼の属官である周顒・虞炎は蕭子良集団に参加して、西邸学士と詩文を唱和していた。

『南齊書』劉繪伝に「永明末，京邑人士盛為文章談義，皆湊竟陵王西邸。」とあるように³⁸、竟陵王の西邸に通う文士の活動は「文章談義」を主としていた。『南齊書』にも「士子文章及朝貴辭翰，皆發教撰錄」と記されている³⁹。すなわち、彼は自分のもとに集まった文士たちに命じて、詩文を創作させたのである。この記述から、当時の彼らの活動の中心が文辞にあったことが分かる。現在見られる応教詩・応教賦はこのようにして作られたと推測できる。杜曉勤（二〇一七）は『六朝聲律與唐詩體格』に、永明律に合う十七首の南齊において作られた五言四句詩を取り上げているが、徐孝嗣による一首を除けば、その全てが西邸学士の作品である。筆者はそれ

は偶然ではないと考える⁴⁰。

『南齊書』は蕭子良を評して「善立勝事」というが、「勝事」とはどのような行事を指しているのか。『南史』には以下のようなエピソードが記載されている。

竟陵王子良嘗夜集學士，刻燭為詩，四韻者則刻一寸，以此為率。文琰曰：「頓燒一寸燭，而成四韻詩，何難之有。」乃與令楷、江洪等共打銅鉢立韻，響滅則詩成，皆可觀覽⁴¹。

竟陵王子良嘗て夜學士を集め、燭を刻みて詩を為る。四韻は則ち一寸を刻み、此を以て率と為す。文琰曰く：「頓に一寸の燭を焼き、而して四韻詩を成す、何の難きことか之れ有らん。」乃ち令楷・江洪らと共に銅鉢を打ちて韻を立て、響滅べば則ち詩成り、皆觀覽すべし。

蕭文琰、丘令楷、江洪は辭藻を得意としたため、西邸に招かれたという。この逸話は彼らが西邸で参加した詩文創作の行事について語られたものである。ここには「四韻は則ち一寸を刻み、此を以て率と為す。」とあることから、創作の時間が限定されていたことがわかる。蕭子良文学集団においては、テーマを同じくする詩がしばしば見られるため、歌う内容は一つに決められていたと推測できる。同じ文学集団において、同じものを歌い、互いに詩文を作って切磋琢磨することで、類似した表現が用いられるようになったのではないだろうか。

蕭子良集団の活動は、以上に述べたような開放的で自由度の高いものであり、それゆえ西邸の場においては多彩な文学活動が展開され、詩文の表現が洗練されていくまたとない機会を創出していたと考えられるのである。

(二) 竟陵王文学集団における詩文創作

前節で取り上げた行事の中では、詩文が創作されていた。本節では西邸において創作された詩文の形式や内容、相互間での影響、また後世の詩への影響について検討する。

西邸において、西邸学士のメンバーの間で創作された詩には「応教詩」、「奉和詩」、「唱和詩」、「贈詩」・「別詩」などが存在したが、これらの詩は大きく二分することができる。その第一は蕭子良が主催した活動の中で作られた詩であり、「応教詩」、「奉和詩」がこれに属する。第二は西邸学士の間で作られた交際詩であり、「唱和詩」、「贈詩」・「別詩」がこれに属する。

1、詩文創作と類書編纂

応教詩や奉和詩は蕭子良の命令によって作られたものであって、個人の創作意欲から作られたものではなかった。内容としても、個人的な情や志を表現したものというより、寧ろ言葉の技巧の訓練として作られたり、あるいは府主との交際の中で生み出されたものといえよう。このような詩はいずれも鮮明な特徴を有し、集団文学の組織や知識のあり方について示唆に富んでいる。こうした作品は類書編纂の行事において誕生したと考えられる。以下、奉和詩から順に考察していく。

奉和詩

字義通りに理解するなら、「応教」と竟陵王の教令を受けて詩文を作ること、「奉和」と竟陵王の命令を受けて彼の詩文に唱和することである。両者にはそれほど大きな違いはなく、いずれも西邸での行事において作られた詩であった。庾肩吾の「奉和泛舟漢水往萬山応教詩」のように「応教」と「奉和」の両方が使われている詩題もある。二つの相違は、蕭子良の命令によって作ったのか、それとも蕭子良の詩に唱和して作ったのかというところにある。ちなみに現存する奉和詩においては、蕭子良自身の作品はほとんど見られない。

ここでは詩題に「奉和」と書いてある詩のみを奉和詩として論じることとする。この条件に当てはまる作品の中で、明らかに竟陵王の命令を受けて作られたものとしては、王融の「奉和竟陵王郡縣名詩」、范雲の「奉和齊竟陵王郡縣名詩」、沈約の「奉和齊竟陵王郡縣名詩」・「奉和竟陵王葉名詩」などがある。現存する資料を見るかぎりでは、物の名を集めて詩を作るのは謝莊の「自潯陽至都集道里名為詩」に始まる。この詩の詩題にある「潯陽」

とは、現在の江西省の九江市である。作者の謝莊は隋王誕の後軍諮議に任官されたことがあり、『宋書』卷七十九によれば隋王劉誕が元嘉二十六年に隋郡王となった時、謝莊もこれに従って雍州へ赴任したという。ここでいう「雍州」は南雍州を指し、謝莊は南雍州から都の建康へ戻る途中に潯陽を通過したのではないかと推察される。この詩において、謝莊は「稽榭」「烟臺」「翔州」「秋浦」「高湖」「南陵」「青溪」「黃沙」「雷池」「茅堂」「魯顯」「秦良」「博望崖」「梁山岑」「崇館」「茂苑」など途中で通過した場所の名前を羅列し、それによって詩を作った。謝莊はもともと地理に詳しく、また興味を持っており、『宋書』「謝莊伝」は彼を「分左氏經傳，隨國立篇，製木方丈，圖山川土地，各有分理，離之則州別郡殊，合之則宇內為一」と評している。地理知識と実際の経験の両方に基づいて、謝莊はこのような「道里名詩」を作ったのである。謝莊より前、荊州の臨海王子頊の前軍參軍に任官されていた鮑照も、建康へ戻る道中で「上潯陽還都道中作詩」を作っており、これは道里名詩ではないものの、同じく地名を詠っている。このように謝莊や鮑照の詩はいずれも実際に経過した場所を詠ったものだったが、竟陵王文学集団で詠われた「郡県名詩」はそれとは異なり、実際に訪れたところを詠うものではなく、自分の頭の中にある地名を、詩文を創作する材料として使ったものであった。

西邸で作られた郡県名詩として、范雲「奉和齊竟陵王郡縣名詩」、王融「奉和竟陵王郡縣名詩」、沈約「奉和竟陵王郡縣名詩」の三首がある。この三首の詩の中に出る「陽臺」「南海」「長安」といった郡県名は、南齊以前にも頻繁に用いられてきた。これに対し「金城」「玉門」「白馬」⁴²「飛狐」「新城」「海西」「杜陵」「西華」「河間」「西都」「南宮」「高闕」「平皋」「清淵」「東光」といった郡県名は、先行する使用例がわずか二三例しか見出せない。さらに「蒼松」「臨涇」「安夷」「廣田」「雲南」「漁陽」「荔浦」「虛丘」「廣牧」「平洲」「曾山」「方渠」「陰館」「樂光」「端溪」「測水」「曲阜」「平臺」「信都」「茂陵」「嶠汧」「曲梁」「陽泉」「陰丘」「望都」「臨戎」「南皮」といった郡県名は齊になってから用いられるようになったもので、西邸で使われたのがその始まりと思われる。

上に列挙した郡県は、いずれも辺鄙で、南朝から遠く離れた場所にあつ

た。したがって、建康で暮らす西邸文人が直接こうした場所を訪れる機会にはほぼ絶無だったと考えられよう。である以上、彼らがこれらの地名を獲得した源としては、書物以外考えられないのである。もちろん書物といっても、その出所が全て類書であったとは限らず、史書や地志からこうした知識を得たという可能性も十分にある。そもそも一つの集団において、メンバー各々の知識の蓄積が全く同一ということは考えにくい。現存する郡県名詩は上に示した三首のみであるが、当時作られた郡県名詩は三首に止まらなかったことだろう。ただメンバー同士の間で共有されている知識は、この集団の活動を通して全員が共に接触し、学んだものであったはずである。主催者である蕭子良は、なぜ自分のサロンで学士たちにこのような作品を詠わせたのだろうか。それは、彼らがほかでもない西邸でこの種の知識を身につけたためではなかったか。だからこそ、郡県名詩は西邸において、学士たちの文字遊戯となったのである。蕭子良が編纂した『四部要略』はすでに佚し、その本来の姿を見ることはできない。ただ後世に作られた『太平御覽』には「州郡部」という部類があり、そこには過去の文献に出る州・郡・県が一定のルールによってまとめられていて、『四部要略』もこれと同様のものではなかったかと想像される。西邸の学士たちは類書の編纂を通じて以上のような地名を熟知するようになったのであり、郡県名詩は類書編纂の余興として誕生したと考えられる。

郡県名詩のほかに、蕭子良に奉和して作られた詩として、沈約の「奉和竟陵王薬名詩」がある。王融も「薬名詩」を作っており、詩題には「奉和」と示されていないものの、これも沈約の詩と同じく西邸で作られた奉和詩だったと考えられる。沈約の「奉和竟陵王薬名詩」には「丹草、重臺、木蘭、射干、辛夷、積雪、玉泉、雲華、合歡、爵林、垂景、連桑、思仙、荆實、龍芻、夜光、玉屑、葳蕤」などの薬名が登場し、王融の「薬名詩」には「重臺、陵澤、石蠶、垣衣、秦芎、楚蘅、神草、夜光」が出る。

こうした薬名詩を、彼らはなぜ作ったのか。確かに西邸学士の中には医学の知識を持つ者があった。たとえば『周書』卷四十七には、姚僧垣をめぐって「嘗嬰疾歷年，乃留心醫藥。梁武帝性又好之，每召菩提討論方術，言多會意，由是頗禮之。」と記されており⁴³、これによれば蕭衍は医家の

姚僧垣と交際していたため、医学の知識を持っていたと考えられる。また『新唐書』「芸文志」には『梁武帝坐右方』十巻と簡文帝『如意方』十巻の名が見える。既に佚しているため、その内容を知ることはできないが、「右明堂経脈類」に分類されていることから、医学書だと推測でき、彼が医学に造詣が深かったことが窺われる。しかし、全ての西邸学士が医学に通じていたわけではなく、少なくとも現在見られる文献からは、王融と医学の関係を窺うことは全くできない。

彼は医学とは無関係に見えるにもかかわらず、どのようにして上の詩に詠み込んだような草葉の名前を知るに至ったのか。西邸学士が編纂した『四部要略』千巻は既に佚し、見ることはできないが、同じく類書である『太平御覧』には「薬部」という分類があり、蕭子良の『四部要略』にもこのような内容であったと推測できる。もともと四部分類法は『晋中経簿』に始まり、今その四部の小類については不明であるが、『七略』や「漢書・芸文志」の方技略、また蕭子良より少し後の時代の梁の阮孝緒が編纂した『七録』には、「医経部」、「経方部」という部類がある（『広弘明集』七録序）。六部と四部とは分類の方法が異なるだけで、収録された書物の内容がそれによって変化するわけではない。ゆえに、『晋中経簿』の「四部」の中には医学の内容も含まれていたと考えられ、蕭子良の『四部要略』にまとめられた内容の中に医学に関する記載が含まれていたことは疑いない。西邸学士は編書の活動において、草葉の名前に接触し得、それを詩文創作に活かしたのではないだろうか。「薬名詩」が西邸での蕭子良の奉和詩として誕生したという経緯も、そのことを証明していると思われる。

応教詩

奉和詩のほかに、蕭子良のもとで作られたもう一つの詩の種類は応教詩である。「応教」の語について、陸龜蒙は「説鳳尾諾」で「諸王下書則曰教…（中略）…應和文章則曰…（中略）…應教」と解説している。このため、蕭子良の命令に応じて作られた詩は「応教」の題名がつけられた。なお、謝朓の「擬風賦奉司徒教作」のように、「奉教」という言い方もある。

応教詩賦からは、蕭子良集団の組織性が窺える。竟陵王西邸サロンにお

いて作られた應教詩賦のうち、現存する作品は、「梧桐」「松」「風」をそれぞれテーマとする三つであり、その一つ一つが詩題群となっている。王融の「応竟陵王教桐樹賦」という詩題から、この「桐樹賦」は蕭子良の命令を受けて作られたということがわかり、蕭子良自身も「梧桐賦」を作っている。以上の詩賦においては、互いに類似した表現や典故がしばしば用いられている。

「擬風賦」は宋玉の「風賦」に擬した作品であり、謝朓・王融・沈約は蕭子良の命令に応じてこの擬作を書いたと思われる。「風賦」の中には「此所謂大王之雄風也」、「此所謂庶人之雌風也」という表現があり、彼らの擬作にも「此乃大王之盛風也」（謝朓「擬風賦奉司徒教作」）、「此烈士之英風」（王融「擬風賦」）、「此蓋羽容之仙風也」（沈約「擬風賦」）といった表現が見える。擬作であるから、この二句を模倣するのは当然のことであるが、互いに重複せず、いずれも別の方面から詠んでいることは、この状況が偶然に起こったのではないことを示すと考えられる。表現が重複しないように、最初から誰が何を描くかが決められていたのではないか。

「梧桐賦」の場合「鸞鳳」「翦珪」「龍門」などの典故は、西邸学士の應教賦においてしばしば用いられていた。それらは『詩経』卷阿、『莊子』秋水、『史記』晉世家、枚乗の「七發」に出る梧桐と関係する典故である。梧桐を描く以上、梧桐に関わる典故を使用するのはごく一般的なことである。但し、西邸学士のように複数人が同じ典故を選んでいるのは、偶然の結果ではないと思われる。さらにいえば、「翦珪」「龍門」の典故が詩において用いられたのは、西邸文人から始まったことである。

詠物詩賦のほか、西邸において作られた應教詩の中には、遊仙詩もある⁴⁴。王融、范雲、沈約が作った遊仙詩にはさまざまな典故が用いられているが、そのうち「瑤池」、「高唐」「燭龍」「貝嶠」「方壺」「清都」などの典故の使用は西邸学士に始まるものである。ここでもメンバー同士の間で、同じような表現を使う傾向が見られる。頻繁に使われる語句であれば、偶然に重複することもあるかもしれないが、あまり使わない語句が重複しているのは偶然とは考えられない。最初にある種の語句が頭にあって、そのうえで作品が作られたと考えるのが自然だろう。こうした語句に接触するきっかけ

けとなったのは、西邸の書籍編纂だったのではなからうか。

以上の分析を踏まえて、筆者は、奉和詩や応教詩など蕭子良が主催した詩文創作活動は、類書編纂の余興活動として誕生したものと推察する。応教詩や○名詩は、志や情を表現するものではなく、作者の学識や語彙を活かして作られたものである。このような活動を通じて新たな表現が続々と誕生し、それらは西邸学士の交際によって広まっていったのである。

2、表現の共有

王融の応教詩に「移席琴室応司徒教詩」という作品がある。その中に「潺湲石榴寫」という句があるが、これは謝朓「和何議曹郊遊詩二首其二」の「潺湲石榴瀉」と非常に似通っている。何議曹とは何煦のことであり、謝朓は「落日同何儀曹煦詩」も作っている。この「潺湲石榴寫」という表現は、二人が西邸へ通った時に、互いに学び合ったものではないかと思われる。

唱和詩

蕭子良が主催した文学活動のもっとも重要な価値は、同時代の最も優れた詩人たちが出会い、互いに学び合う機会を提供したことであった。蕭衍と蕭琛・沈約・范雲が出会ったのは西邸においてであり、任昉が王僧孺と出会ったのも西邸においてであり、『梁書』には彼らについて「以文學友會」と書かれている。彼らは交遊を通じて同題詩や唱和詩を作った。唱和詩を作る場合、相手と一致する表現を使用する傾向がある。このような活動の中で、詩の言語表現が作り出され、また広まっていった。

以下に挙げる詩は、西邸の行事で詠われ、互いに唱和する詩である。

詩語	用例
翻階	翻階沒細草。(王融「詠池上梨花詩」) 露庭晚翻積。(劉繪「和池上梨花詩」)
暮歷	暮歷草初輝。(虞炎「餞謝文學離夜詩」) 暮歷女蘿草。(王融「詠女蘿詩」) 暮歷君之楹。(王融「詠幔詩」)
綠蒨	葳蕤動綠蒨。(謝朓「詠風詩」) 南階寒綠蒨。(沈約「詠餘雪詩」)

江南、地	江南簫管地。(沈約「詠簾詩」) 江南佳麗地。(謝朓「隋王鼓吹曲十首・入朝曲」)
金卮	玉座奉金卮。(謝朓「同詠坐上所見一物・席」) 金卮浮水翠。(王融「遊仙詩五首・其二」)
曖曖	曖曖映容質。(虞炎「詠簾詩」) 曖曖日將落。(謝朓「紀功曹中園」) 曖曖囑遊絲。(蕭衍「天安寺疏圃堂詩」)
四面、寒色	四面動清風, 朝夜起寒色。(沈約「臨高臺」) 四面通寒色, 左右竟巖飆。(王融「齊明王歌辭七首・清楚引」)
再三、四五	雕梁再三繞, 輕塵四五移。(沈約「詠簾詩」) 飛蛾再三繞, 輕花四五重。(謝朓「雜詠三首・燈」)
聲、指	妙響發孫枝。殷勤寄玉指。(沈約「詠簾詩」) 聲隨妙指續。(沈約「詠箏詩」) 妙聲發玉指。(蕭衍「詠笛詩」)
一色	連綿復一色。(謝朓「詠兔絲詩」) 山河同一色。(蕭衍「臨高臺」)
如絲	綠草蔓如絲。(謝朓「王孫遊」) 楊柳亂如絲。(沈約「春詠詩」)
龍門	龍門空自生。(王融「詠琵琶詩」) 龍門生死枝。(謝朓「同詠樂器・琴」)

以上の詩はほぼ西邸において作られた唱和詩や同題詩である。現存する詩を対象とする調査に基づけば、「翻階」「暮歷」「綠苑」「金卮」「曖曖」などは全てこの場から用いられ始めた。また、たとえば王融の「詠池上梨花詩」と「綠苑」という語の並行例は謝朓の「詠風詩」と沈約の「詠餘雪詩」にしか見られないが、このようにあまり用いられない言語表現を共通して使っているのは決して偶然ではなく、どちらか一人が最初に発明した表現が、西邸において学び合いを通じて共有されたのではないか。別の例として、「龍門」⁴⁵は王融・謝朓がはじめて使用した典故というわけではないが、もともと琵琶は梧桐から制作された楽器ではないにもかかわらず、ここで王融は謝朓と同じような典故を用いている。「一色」⁴⁶「如絲」の使用自体はよく見られるものの、西邸学士の使い方は他の詩人たちとは全く異なるのである。これも彼らの間の相互の影響ではないのか。上で取り上げた「四面」「寒色」「再三」「四五」の用例はあまりにも類似しており、明らかに相互間の影響が見てとれる。

蕭子良「梧桐賦」には「聳輕條而麗景，涵清風而散音。」、謝朓「高松

賦奉竟陵王教作」には「懷風陰而送聲，當月露而留影。」という表現が見られ、この二句のうち「涵清風」と「懷風陰」、「音」と「聲」、「景」と「影」は見事に対応しており、それぞれ風・光・影という角度から樹木を描いている。このような類似の表現は、西邸での学び合いを通じて生まれたのではないかと疑われる。

贈別詩

蕭子良集團のメンバーたちは、仲間内の誰かが地方へ赴任するとき、別宴を開いて別詩を交わした。西邸文人によって書かれた別詩の中には、しばしば互いに類似する表現が見られる。西邸学士の間で行われた別宴として確認できるものとして、蕭衍・謝朓が蕭子隆に従って荊州へ赴任した時の宴がある。隨王蕭子隆は永明八年に鎮西將軍に任命され、やがて荊州刺史となり、荊州へ赴任した。蕭繹は「興王篇」に蕭衍が永明九年に鎮西諮議に任官されたことを記しており、この別宴もその頃に行われたと見られる。蕭衍のために送別詩を作ったのは王融、任昉、蕭琛、王延、宗夬などであり、蕭琛の「別蕭諮議前夜以醉乖例今晝由醒敬教詩」という詩題から、蕭子良もこの別宴に参加したと推測できる。謝朓はこれより前に隨王文学となったようであるが、謝朓に送別詩を贈ったのは王融、沈約、范雲、蕭琛、劉綰、虞炎である。詩を作ったメンバーに異同があるのは、宴会自体が別々であるためとも考えられるが、もともと更に多くの詩があったものの、一部を残して亡佚してしまったという可能性もある。現存する詩から判断して、王融と沈約はいずれも謝朓のための別宴に出席したようである。沈約は別宴で「餞謝文學離夜詩」という作品を作っているが、その中に「以我徑寸心，從君千里外」という詩句が見える。この句は王融が蕭衍を送別する時に詠った「江山千里長，寸心無遠近」（王融「蕭諮議西上夜集詩」）と非常に似通っている。このように「千里」と「寸心」を対比して詩に用いることは、彼らから始まっている。王融はさらに「古意詩二首・其二」でも類似の表現を用いて、「千里不相聞，寸心鬱紛蘊」と詠った。これと同様の例として、謝朓を送別する時に作られた劉綰の「餞謝文學離夜詩」と蕭琛の「餞謝文學詩」には、いずれも「徒望西飛翼」、「悵望南飛鴻」の「望

…飛」の表現が用いられているが、これもやはり偶然ではないだろう。さらに、王融は蕭衍を送別するための「蕭諮議西上夜集詩」で、「山中殊未懼，杜若空自芳」と詠い、「杜若」の典故を通して、友人への送別の情を表現している。ここに出る「杜若」は、それより前に詠われている『楚辞』での、山の中の香草というイメージとは異なる一方、謝朓の「芳洲有杜若，可以贈佳期」（謝朓「懷故人詩」）に詠われる、友人への思いを伝える杜若とは一致している。また、宗夬の「別蕭諮議」、蕭衍の「答任殿中宗記室王中書別詩」、蕭琛「別蕭諮議前夜以醉乖例今晝由醒敬應教詩」という三首の詩には、いずれも「蘭」が詠われているが、それは宴の場での実景ではないかと思われる。

以上に取り上げた詩は、そのすべてが西邸で作られたわけではない。しかし少なくともそのうち一首は唱和詩や送別詩として西邸学士の間で詠われ、その場でメンバー同士で詠み合う機会があり、それからほかの場で同様の言語表現が使われるようになったのである。

3、表現の継承

以上、西邸における言語表現の誕生と西邸学士の間における拡散について分析してきた。続いて郡県名を中心に、西邸で生まれた語句の後世への影響を論じたい。上で述べたように、南齊以前の文人五言詩と五言樂府には「玉門」「飛狐」のいずれの語句もあまり使われてこなかった。「玉門」「飛狐」「白馬」「南皮」「平皋」などの語句は、北地の地名であり、ずいぶん前から史書には登場してきた。しかし、爆発的な増加は西邸での詠い合いの後に始まったのではないかと考えられる。

「玉門」の最初の使用例は鮑照の「建除詩」において見られ、范雲の「奉和齊竟陵王郡県名詩」が使い始めたものとは言えないが、彼が詩に歌う以前には、この一つしか用例が見られない。范雲以降、同じく竟陵王文学集団に所属する虞羲も「玉門」を用い、それからしばしば詩に用いられるようになった。范雲の「奉和齊竟陵王郡県名詩」において使われた「金城」は、はじめて金城が地名として使われた例である。その後、蕭綱はこの使い方を継承し、この用法は唐代まで続いた。そのほか、「漁陽」「平臺」「茂陵」「臨

戎」などの語句も同じように詩に登場するようになった。梁詩には南朝から遠く離れた北地の地名が多用されており、このような語句の使用は唐代まで継承され、特に辺塞詩に多く用いられた。

西邸において歌われた郡県名詩をきっかけに、なじみのない古代の地名が再び詩において使用されるようになった。蕭梁以降、唐に至るまで、辺塞詩の創作は次第に増加した。辺塞詩の重要な素材としての北地の地名は、西邸で作られた郡県名詩において、すでに登場の準備が整っていたのである。

おわりに

以上、蕭子良の西邸の性格と詩文創作についておおまかに分析した。集団とは、そこに所属する文人が互いに交際し、知識・表現を共有する場である。ある語句を使用する際に、他人との関わりなしに一人で使用していたのでは、文学史に影響を与えることはできない。集団が結成され、その中で新たに作り出された表現を相互に学び合うということがあったために、その表現がほかの場へと広まり、ひいては言語表現を豊かにしていったのである。蕭子良の西邸は当時の一流の詩人たちに、詩の表現を切磋琢磨する場を提供し、そこで行われた詩文創作活動は、齊梁、さらに隋唐に至るまでの詩文表現に影響を与えた。文人たちが集団の中で互いに及ぼした影響は無形であるため、その存在を推察することは難しい。集団の内部において、彼らがいかに影響を及ぼし合ったのか、また言語表現がどのように後世の詩人に継承されたのかということについて、書物には明記されていない。しかし西邸で作られた応教詩や唱和詩の表現を通じて、南朝における集団文学の形成とその特質を明らかにすることができるのである。

なお、書物編纂や詩文創作のほか、当時の西邸においては楽府の制作も行なわれていた。現在見られるものとしては王融の「齊明王歌辭七首」⁴⁷、「永明樂十首」、謝朓の「永明樂十首」があり、『南齊書』『樂志』には「永平樂歌者、竟陵王子良與諸文士造奏之。人為十曲。」とあり⁴⁸、これが蕭子良の主催した活動であったことが分かる⁴⁹。上記の他には鼓吹曲も作ら

せており、現存する作品として王融・謝朓・劉繪によって作られたものがある。齊梁における楽府の盛行は、これを背景としたものだったのではないか。この活動は楽府の創作や楽府民歌の語彙を文人世界に取り入れ、梁武帝の蕭衍を通じて梁にまで影響を及ぼした。紙幅のため、論じることはできないが、今後の研究課題としたい。

- 1 本文で言及する「文学」とは、現代的な意味における文学ではなく、古代の用法に従い「文学・学問」を意味するものとする。
- 2 『史記』、中華書局、一九八二、二三九五頁。
- 3 『文苑英華』、中華書局、一九六六、一八五九頁。
- 4 『梁書』、中華書局、一九七三、二三三頁。
- 5 鈴木虎雄「沈休文年譜」『業間録』、弘文堂書房、一九二八年、一六頁。
- 6 同上、一九～二〇頁。
- 7 謝超宗は蕭子良の征北諮議に任官されたことがあるが、柏俊才（二〇〇八）は彼が蕭子良の文学集団に参加していないことを指摘する（『竟陵八友考論』、華中師範大學、博士論文）。
- 8 嚴耕望『魏晉南北朝地方行政制度』、中央研究院歴史語言研究所、一九六三年、二一三頁。
- 9 『南齊書』劉繪伝：時豫章王嶷與文惠太子以年秩不同，物論謂宮府有疑，繪苦求外出，為南康相。
- 10 汪春泓「論王儉與蕭子良集團的對峙對齊梁文學發展之影響」、『文学遺産』、二〇〇六年第三期。
- 11 「帳内軍主」はもともと人数が限られており、多くは任用できないが、蕭子良の選んだ七人はどこか無理に頭数をそろえたようにも見える。たとえば蕭衍はそれほど蕭子良を支持してはならず、王融は無謀であり、蕭懿は子良と特に親交はなかった。
- 12 王淑嫻「蕭子良文人集團之組成及其政治意義試探」、『中正歴史學刊』、二〇〇四年第七期、二一頁。
- 13 劉躍進、王淑嫻、汪春泓は蕭子良の文学集団の結成を政治上の判断によるものと考えている。劉躍進によれば西邸文士は蕭子良の謀士であり、王淑嫻によれば西邸文

士は文恵太子のために集められたという。劉躍進『門閥士族與永明文學』、三聯書店、一九九六年。王淑嫻は前掲注十二論文を参照、汪春泓は前掲注十論文を参照。

14 『南史』、中華書局、一九七五年、九七二～九七三頁。

15 前掲注四、四六九頁。

16 石井仁「南朝における随府府佐 -- 梁の簡文帝集團を中心として」、『集刊東洋学』、一九八五（五三）、三四頁。

17 川勝義雄『六朝貴族制社会の研究』、岩波書店、一九八二年、二九一～二九二頁。

18 前掲注十四、一六九頁。

19 前掲注十四、五七八頁。

20 前掲注十論文を参照。

21 前掲注十二論文を参照。

22 『南齊書』、中華書局、一九七二年、六九八頁。

23 前掲注二二、六九四頁。

24 前掲注十四、四〇〇頁。『金樓子』「説蕃」は劉休慶とする。

25 『至正金陵新志』、成文影元至正四年刊本。顧祖禹『讀史方輿紀要』では「宋元嘉十六年」とされる（「卷二十・南直二」）。ただし『南史』には「（元嘉十五年）立儒學館于北郊，命雷次宗居之」とあるため、十五年が正しいと思われる。雞籠山は雞鳴山、龍山ともいい、覆舟山の西南方向にある。

26 丁國祥「齊梁文人集團與類書編撰」、『現代語文』學術綜合版、二〇〇八第四期。

27 『徐公文集』卷二十四、四部叢刊初篇集部。

28 顧祖禹『讀史方輿紀要』、中華書局、二〇〇五年、九六八頁。

29 『梁書』宗夬伝：齊司徒竟陵王集學士於西邸，並見圖畫，夬亦預焉。『梁書』王亮伝：齊竟陵王子良開西邸，延才俊以為士林館，使工圖畫其像，亮亦預焉。

30 『漢書』卷五十四：上思股肱之美，乃圖畫其人於麒麟閣。法其形貌，署其官爵姓名。

31 『後漢書』卷五十二：永平中，顯宗追感前世功臣，乃圖畫二十八將於南宮雲臺，其外又有王常、李通、竇融、卓茂，合三十二人。

32 前掲注二十二、四三六頁。

33 前掲注二十二、四三六頁。

34 ここでは西邸が学館的な性質をもっていることを指摘したが、実際に学館であったと主張するものではない。

- 35 前掲注十四、一一〇三頁。
- 36 前掲注二十二、六八五頁。
- 37 前掲注十四、一一三頁。
- 38 前掲注二十二、八四一頁。
- 39 前掲注二十二、六九四頁。
- 40 杜曉勤『六朝聲律與唐詩體格』、北京大學出版社、二〇一七年、七八～八五頁。
- 41 前掲注十四、一四六三頁。
- 42 「白馬」の語自体はよく用いられたが、地名としての「白馬」の用例は王祭「從軍詩五首・其四」の「朝發鄴都橋，暮濟白馬津」のみである。
- 43 『周書』、中華書局、一九七一年、八二九頁。
- 44 沈約が作った詩の詩題は「和竟陵王遊仙詩二首」であり、王融の「遊仙詩五首」について、『古詩紀』卷六十七には「集云応教」というため、応教や奉和の作だと分かる。蕭衍も「遊仙詩」を作った。
- 45 謝朓の「詠琴」について、『詩紀』には「王融詠琵琶，沈約詠箏，各見本集」とある（『古詩紀』卷七十一）。王融の「詠琵琶詩」は謝朓の「詠琴」と同じ場、おそらく西邸で作られたものであろう。
- 46 王融の「詠女蘿詩」に対して、謝朓は「詠兔絲詩」を作った。「古詩十九首・其八」には「與君為新婚，兔絲附女蘿」という詩句があることから、謝朓の「詠兔絲詩」と王融の「詠女蘿詩」も唱和の作と推察される。あるいは西邸で詠われたものか。
- 47 『古詩紀』には「応司徒教作」とあり、蕭子良西邸で作られたことが分かる。
- 48 前掲注二十二、一九六頁。
- 49 『樂府詩集』では「永明樂」とし、『南齊書』「樂志」の内容を引用した上で、永明中に作られたために「永明樂」と名付けたという（「卷第七十五・雜曲歌辭」）。